

## 防衛大学校の在り方について（防衛省 OB 鼎談）

石塚泰久  
川崎方啓  
赤瀬正洋

北朝鮮の相次ぐミサイル発射や、ロシアのウクライナ侵攻にみられるように、国際情勢はこれまで見られなかったほど厳しさを増している。政府は、これに対応するため安全保障関連三文書の策定を進め、防衛力の強化を図っている。これは、反撃能力、防衛産業の強化、各省庁連携の拡充など包括的なものとなっていると思う。

これに加えて、重要となるのが、こうした防衛力を扱う人の問題である。若年人口の減少が指摘される中、自衛隊がいかに必要な人材を獲得するかなど問題は多岐にわたるが、ここではその自衛隊の中核となる人材を養成している防衛大学校の在り方について議論をしてみたいと思う。言うまでもなく、防衛大学校卒業生は自衛隊の幹部の中核となっており、自衛隊がいざという時に能力を十分発揮できるかは、彼らにかかっている。その任務は、近年、災害派遣など国内から、PKOをはじめとする国際任務にまで拡大し、いずれも素晴らしい成果を残してきており、こうした成果の裏には、これを指揮した防衛大学校卒業生を中心とする優秀な指揮官たちがいることは間違いないと思われる。その彼らを、教育訓練し、養成を行っているのが防衛大学校であり、これまで、その卒業生は、高い評価を得てきたともいえる。

しかしながら、国際情勢が厳しさを増すなか、これまでになく厳しい対応を求められる可能性もある中、防衛大学校の在り方について考える必要があるのではないかという問題意識が本稿の出発点である。

防衛大学校の在り方を考えるとき、2021年3月に退官された第九代学校長の国分良成校長の行われた改革（「新たな高みプロジェクト」）を忘れることはできない。

英語力の強化などグローバル人材育成策の強化や、いじめ事案などを踏まえたリーダー人材育成策など成果を上げていると思う。しかしながら、防衛大学校を取り巻く環境は、国分学校長退任後も、安全保障関連三文書の策定や、ロシアのウクライナ侵攻にみられたドローンの使用やフェイクニュースなどのSNSを用いた新たな動きへなどとともに、ますます若年人口が減少していく中でいかに優秀な学生をいかに確保するかなど、自衛隊の中核をなす防衛大学校学生の教育の在り方について改めて考えていく必要があるものと考えられる。

本稿は、上記問題意識に基づき防衛大学校副校長経験者であり市ヶ谷論壇会員でもある石塚、赤瀬及びつい近年まで防衛大学校を管理していた人事教育局に在籍していた同じく市ヶ谷論壇会員の川崎による議論の概要である。なお、この議論は、3人がそれぞれの経験等を踏まえ個人の立場で議論したもので、11月に行われたものである。

また、本稿作成に当たり、防衛大学校改革などについては、第9代学校長国分良成氏の「防衛大学校 知られざる学びの舎の実像（中央公論新社）」を参考とさせていただいた。

## 1、学生募集

（石塚）

まず、学生募集についてまず議論を始めたいというふうに考えております。

防衛大学校の入試制度はこれまでさまざまな変遷を受けてきて、今は私の理解では、3つのタイプの試験をやっていると、一つは防衛大学校へのしっかりした考えを持つ受験生を集めるという形で推薦入試、学校長の推薦なりを持った生徒を集めるというもの。もう一つは、適正のある学生を集めるということで、学生に集団行動をさせて、本人のいろんな特技みたいなものを喋らせたりするという、そういうものをやる試験と、それからもう一つは普通の受験と同じで、ペーパー試験を中心に試験をして学生を集めると、この3種類で途中はいろいろ紆余曲折もあったんですけども、今は多分この形で落ち着いているというふうに思います。

現時点でこうした制度で十分な学生、必要な学生を集められているかどうかということについては、私は個人的には私の頃はあまりそういう問題があるという話は聞いてなくて、この制度もそれなりに時間を経てそれなりに充実したっていうか、定着したものになってるように思うので、防衛大学校のニーズに合わせて必要な学生を取ってるんじゃないかというふうに思いますけど、皆さんの意見をちょっと伺わせてもらえればというふうに思います。

（赤瀬）

採用試験において、推薦、総合選抜、一般の3区分を設け、多角的に受験生を評価し、採用していることは、必要な学生を確保する上で有効に機能してきていると思います。

とはいえ、近年の少子化に伴う18歳人口の減少が進み、かつては受験生数が1万5千人を超えていたにもかかわらず、現在は1万人を切っている状況です。

このような厳しい状況ではありますが、今年度は一部で受験者の増加傾向がみられたりしています。これは、防衛大学校が危機感をもって、一部試験会場の全国展開、入試広報の強化などの様々な施策を行っていることなどが寄与しているのではないかと思います。

このような意味で、現時点においては、必要な学生を何とか確保できている、何とか踏み

とどまっている状況であるように思います。

しかしながら、中長期的には更に状況が厳しくなることは明らかであり、このままでは、例えば、理系男子の偏差値は50を切ってしまう恐れもあろうかと思えます。

それ自体、防衛大学校のイメージダウンにつながりかねませんし、その場合、これまでと同様、毎年480人の学生が入学してきたとしても、基礎学力については必ずしも十分ではない学生が相当数含まれるといった状況になる恐れがあるのではないかと思います。

したがって、更に受験者層を発掘し、優れた素養を有する学生を今後も確保し続けるためには、入試制度の改革や入試広報施策の拡充など、これまで以上に相当ドラスティックに取り組んでいく必要があるかと思えます。

(石塚)

入試制度の改革は今では特に議論しているとか検討しているということは現段階ではないんですか。

(赤瀬)

入試制度という観点からは、これまでも、募集区分毎の人員バランス、合格発表の時期、試験科目などについて見直しを適宜行ってきているところですが、今後も更に工夫することが必要になるのではないかと思います。

一般大学のトレンドとしては、推薦・総合選抜の募集人員の拡大や、合格発表の前倒しなどがあるようですが、防衛大学校としてもどうするかということであろうし、一般に試験科目を減らせば、受験者は増えるのでしょうが、例えば、数学を外せば、概して数学の学力の乏しい学生が入学してくる可能性が高まりますので、そのあたりについても十分検討する必要があろうかと思えます。

これは必ずしも学生募集の観点からというわけではありませんが、現在2:8となっている文理比率についても検討を行っているようですし、女子学生についても、現在、100人まで増やしてきておりましたが、将来的には更なる拡大についても検討を要するのではないかと個人的には思っております。

(石塚)

採用比率、採用数が少ないこともあって、一般的には文系のほうが競争が厳しくて、偏差値で測ると偏差値が高いっていうことになって、女子も同じような形で結構採用数が少ないから、競争が厳しくなって難しい試験になっているということはあるということですね。

(赤瀬)

文系学生や女子学生の募集人員の拡大は、結果として、受験者層の拡大や優れた素養を有

する学生の確保にも資するのではないかと思います。

防衛大学校に入ってくる学生の特色として、かなり高い学力を有する学生も相当数おり、他大学に比し、学力分布のばらつきが大きいように思います。そのため、学生間の意識に差があったり、学生の基礎学力不足を嘆く声があったりもするわけです。

これまでのところ、防衛大学校の伝統的な手厚い教育手法により、意識や学力が必ずしも十分ではない学生についてもきっちりと底上げを図り、幹部自衛官として必要な基礎的資質を有する幹部候補生を十分送り込んできているのではないかと思います。

しかしながら、今後の厳しい募集環境に鑑みると、いかに入試制度の改革などを行ったとしても、やはり基礎学力などが必ずしも十分ではない学生がこれまで以上に増えてくる可能性は否定できないように思います。

そうなると、防衛大学校において、入学から卒業までの間に埋めるべきギャップがこれまでに以上に大きくなることとなりますので、それを十分に実施できるだけの体制を整備することについても検討が必要になってくるかもしれません。

(川崎)

私が昔、人材育成課で課長をしていた頃に、ちょうど新しい入学試験の区分を導入しようじゃないかという議論が、防衛大学校で行われていたんですね。それで相当いろんな議論があった結果、冒頭石塚さんからご紹介になった3つのやり方でやってみようということになって、それで最初は果たして新しい試験区分を導入してですね。どのぐらい学生が本当に応募してくれてくるのかっていうのは、みんな確信は持てない中で手探りでスタートしたんですけれども、その後今年の春に入学試験の結果を見ると、かなりの採用数に対してかなりの志願者の学生数が確保されていますし。

結果としては倍率もそれなりにかなりの倍率の入学試験の結果になっているので、そういう意味ではこの制度を導入して非常に正解だったのかな、というふうに思っています。ただ当時も若干議論はありましたけれども、やはり、試験区分が増えると試験問題を用意したり試験を実施したりする先生方や事務官、自衛官の皆さん方の負担というのは、やっぱり単純に考えると3倍ぐらいになるので、それをしかも毎年毎年やっていく。となると結構皆さん忙しいんじゃないかと思うんですね。

ですから、そこら辺あまり無理がないようにですねうまいやり方を工夫してやっていただければいいのかな、というふうに私は感じました。

(石塚)

ある種のトレードオフで手間をかければそれで成果も上がるが、防衛大学校ももちろん募集だけやってるわけじゃなくて、学生の教育とか仕事がたくさんあるんですね。もちろん学生が集まらなければどうしようもないというところもあるんですけど、その両方のバランスをとってやっていくような感じ。

(石塚)

今の問題の関連で、今の防衛大学校の学生は実質は全国の地方協力本部（以下地本と記述）をお願いして採用してもらっているわけですが、最近これはだいぶ議論になってますけども、募集難もあって任期制士ですけどね、非常に取れなくて 5 割しか取れてないとかです。種目によっては 30%しか取れていないとかです。地本がだいぶ苦労している現状なんですけれども、防衛大学校については今のような状況だと今の地本の体制で十分、これからも少子化が進んでも大丈夫だというような考えですかね。

また、地本との協力関係については、防衛大学校の中で今どんな感じで見ているのかな、というのを、もし何かコメントあれば

(赤瀬)

募集に関しては、地本の皆さんについては、大変ご苦労されているかと思えますし、防衛大学校学生を含めて、以前に比べても、相当力を入れて、募集にあたって頂いていると実感しており、大変ありがたいと思っておりました。

地本と防衛大学校の関係で、これまで時々言われておりましたのは、地本に防衛大学校卒業幹部は少なく、意外と防衛大学校のことを良く知っている人が少ないということでした。

そのため、地本の広報官の皆さんなどに情報提供、情報交換などを行う機会を設けるなどしてきたところでありますが、実際に募集にあっている方々に防衛大学校の魅力を感じて頂くことは非常に重要ですので、今後更に拡充していくことが必要であろうかと思えます。

また、これまで募集については、地本に全くお任せという感じであったわけですが、近年、防衛大学校としても、地本と緊密に連携しつつ、当事者として積極的に募集に関わっていかうとしております。

例えば、地本における説明会に防衛大学校の教官や職員、学生を派遣したり、高校等への広報の実施、学校長等による講演などを含む学校説明会の実施などに取り組んでいます。

やはり、防衛大学校自身が、自ら学生確保に取り組む姿勢を示すことが大事だと思いますし、教官や学生が直接防衛大学校の魅力を発信することは非常に有効だと思いますので、更に積極的に取り組んでほしいと思えますし、そのために必要な体制整備にも努めてほしいと思えます。

(川崎)

そうですね、私からは繰り返しですけども、入試の結果を見るとですね。かなりしっかりとした採用数が確保できている状況だなというふうに思っています。

それで当たり前のことですけども、防衛大学校というのは性格は一般の大学とは違ってかなり特殊な面があったり、全寮制という今どきの若い人にとっては結構、入学にあたっ

てはちょっとハードルが高そうな仕組みの学校であるという面があります。

そういうことを考えると、これだけの数の志願者を毎年確保できていて、しかもきちっと採用するのを確保できている。というのは、募集面でのかなり大きい成果というふうに考えているんだろうと思います。

ですから今冒頭、赤瀬さんがおっしゃったように、地本の広報官の方が相当苦勞をして高校であるのか、学生本人だとか、あるいは学生のご両親などに働きかけた成果というのが、まさにこういう形で現れてきているのではないのかな、というふうに、そこは率直に私は地本が立派な活動をされていくんだというふうに考えます。

ただ、先ほどからお話出ているように、とにかく若者の数が非常に大きく、これから減っていきますので、さすがに防衛大学校の志願者もですね。やはり、数が減っていく可能性というのは我々としては考えておかなければいけないので、そのためのいろいろな募集上の工夫というのは、今赤瀬さんがおっしゃったようなことを考えていく必要があるんだろうなというふうに、そこも全く同感でございます。

(石塚)

あとはそれに関連して、募集の前提として、赤瀬さんも今ふれたのですが、防衛大学校の認知度ですね。これは、やっぱり僕の個人的な経験としては、例えば若年層ですね、実際に防衛大学校を受ける高校生とか、そのくらいの人にとってはあまりまだ防衛大学校のことは知らないという人が多くて、ちなみに私の経験では、例えば「空飛ぶ広報室」というドラマがだいぶ前にありましたけど、その時は防衛大学校の人气がっぺんに上がって志願者数がものすごく増えて、その後しばらく経ってまたすごく減っちゃってということがあった。

若者受けするようなドラマとかですね。そういったもので、防衛大学校を取り上げてもらう、あるいは、防衛大学校もしくは、防衛大学校の卒業生の活躍を取り上げてもらうと思います。防衛大学校についての理解が広がるということで、防衛大学校が一生懸命PRしても、高校生の日常の生活の中で見るものを中心に考えているんで、そこら辺を工夫しないと将来的には、募集状況は厳しいと思うんですけど、防衛大学校の認知度について、募集の前提として、今、防衛大学校はどんな感じでされているんでしょうか。

(赤瀬)

おっしゃられたように、防衛大学校の認知度を上げることは非常に重要だと思います。自衛隊周辺の人とは勿論防衛大学校を良く知っていますが、防衛大学校の存在自体は知っていても、なんか厳しそうなところぐらいの認識にとどまっている人が結構多いのではないのでしょうか。

学生についても、アンケートなどを見ていると、どうしても幹部自衛官になりたいと思って入学してくる学生は案外少なく、結構ふわっと入ってくる学生も多いように思います。

そういった学生についても、4年間でしっかりと防衛大学校の精神を叩き込まれて、立派な幹部自衛官として巣立っていくところが、防衛大学校の教育システムの素晴らしいところであるように思います。

そういう意味でも、意識が高いか否かにかかわらず、とにかく防衛大学校を受験しようと思う学生を増やすことがかなり大事だと思います。そのため、テレビドラマなどで取り上げられることは非常に良い機会だと思いますので、いろいろと事情はあるかと思いますが、出来る限り支援し、最大限活用していったらよいのではないかと思います。

今、週刊少年サンデーに「あおざくら 防衛大学校物語」が2016年から掲載されていて、主人公はまだ3年生のようですが、とても人気があるようです。防衛大学校学生も少なくとも入学前までには殆どの人が読んでいます。

おそらくOBに取材して描かれていたためか、今は行われていないようなパワハラ的シーンが結構出てきていたりしましたが、作者の二階堂ヒカルさんが昨年久保学校長を訪問されましたし、直接取材もされているようですので、今は、現在の防衛大学校の姿に近づいているのではないかと思います。

「あおざくら 防衛大学校物語」がドラマや映画化されて、一層人気となり、募集に良い影響を与えることを期待しております。

しかしながら、そのような神風に頼るだけではなく、やはり防衛大学校自身で、防衛大学校の魅力を、様々な手段を駆使して、より多くの若者や保護者に伝える努力を行っていくことが本筋ではないかなとは思っています。

(川崎)

まさにおっしゃられたとおりだと思います。

卒業式の模様が毎年テレビで必ずニュースでわーっと出るので、防衛大学校っていうものがあって、そこに多くの学生が制服を着て勉強しているんだということ自体は、おそらく日本中で相当知られているんだと思うんですね。

ですから、そういう意味では非常に認知度は高いんじゃないかな、という気がいたします。ただ今出ていたように、実際大学に入って結構忙しい毎日ですよ。

普通の勉強に訓練もあり、部活動もあってということで、そういうどんな毎日を過ごしていくのかというようなこととか、あるいは防衛大学校を卒業して幹部自衛官になってどういうキャリアを自分は歩んでいくことになるのかとか、そういうことについては、もしかすると必ずしも今の若い高校生が十分に知る機会が少ないのかもしれないので、そういうところはいろいろ今も既にやられていると思うんですが、そういう工夫を普段に続けていくということなんだろうなと思います。

(赤瀬)

近年、学校や学生は、以前よりも相当熱心に、ホームページ、YouTube、X、Instagramな

どで発信を行うようにはなってきていると思いますが、再生回数などについては、せいぜい何千回というのが多いのではないかと思います。

現状の体制ではなかなか難しいかと思いますが、他の一般大学と一緒にできないところはあるかと思いますが、是非、桁を一桁、二桁あげることを目指してほしいと思います。

防衛大学校については、中の人あまり認識がないように思うのですが、外からのお客さんから見ると、生活・教育環境についてはなかなかのもので、学生や教官の質もかなり高く、学生の教育・指導体制については他大学よりもずっと手厚く、濃密であるように思います。このような防衛大学校の魅力はまだまだ十分アピールできていないような気がします。

(川崎)

例えば自分自身のことであるとか、あるいは自分の知人のことを振り返ってみても、高校生ぐらいのときにこういう大学に入って、将来こういうことをするんだという明確なイメージを持っていたってことはあまりないのではないかなという気がするので、防衛大学校がどんなところか詳しい知識もなしにふわっと入ってきた学生がたくさんいたとしても、それは決してそんなに不自然なことではないと思いますし、今赤瀬さんおっしゃったように、そこでいろんな教育を受けたり、いろんな先輩の話を聞いたりしながらだんだん育っていくっていうことでも十分いいのではないかなという気はいたしますので、それほど心配する必要もないのかなという気はいたします。

## 2、教育

(石塚)

次に防衛大学校で行われている教育について議論していきたいと思うんですが、防衛大学校の特色ある教育として防衛学についての教育を行っているということなんですけれども、近年の戦争、特にウクライナ侵攻に見られるドローンとかインターネット等の最新の技術を用いた新たな戦い方がたくさん見られるという状況になってますけども、こうした新たな戦い方について防衛大学校の教育の中でも教えてると思うんですけど、今その扱って言いますか、積極的に教えるような形になってるのかどうかとかどういふ対応してるのか、もし何かご存じでしたら教えていただければ、というふうに思いますけども

(赤瀬)

いわゆる新領域に関しては、自衛隊として対応を強化しているわけですので、その中核となる幹部自衛官の育成を目的としている防衛大学校においても、当然しっかりと対応しております。防衛学教育学群において科目の変更、充実を行っておりますし、各学群が協力し



て、宇宙・サイバー・電磁波に関する領域横断プログラムを実施するなどしています。学生も強い関心を持っているように思います。

ただし、新たな戦い方などについて具体的な事項について専門的に学んでいるというよりも、幹部自衛官として、将来きちんと対応できるように、基本的な素養として学んでいるということではあろうかと思えます。

一方、専門教育としては、電気情報学群に情報工学科が従来から置かれていましたが、サイバーに関する教育・研究分野を拡充するため、サイバー・情報工学科に改編していますし、理工学研究科においても、サイバーに関する教育研究分野の新設等を行っています。

更に、防衛大学校においては、研究機能も有しており、装備庁は勿論、外部機関などとも連携しつつ、新領域などを中心にして、戦略的重点課題研究、防衛特別基盤研究、クロスドメイン研究等を実施しており、一般的には、あまり十分知られていないところがないわけではないですが、相当の成果を上げているようです。

このような研究分野における防衛大学校教官の活躍は、防衛体制の強化に寄与するのみならず、学生教育にも良い影響を与えるうえ、しっかりと発信することにより防衛大学校のブランドイメージを高める、学生の募集にも良い効果があるように思います。

そういった意味でも、防衛大学校の研究環境を更に良いものとし、優秀な研究者に更に来たいと思ってもらえるような研究組織の在り方についても検討を行う必要があるように思います。

(川崎)

そうですね。今のお話に尽きると思います。私も今非常に国際社会がですね、かつてないような大きな動きになっていますので、そういった国際情勢の動きの中で特徴的な技術動向であるとか政治面での動きとかをいろいろ整理をして、学生に素養なのか、あるいは専門教育なのか、それはいろいろテーマによって違ってくると思いますけれども、それを将来幹部自衛官になる学生に、教えていくということは非常に重要なことだと思いますので、それほぜひ力を入れていただきたいと思っています。

こういう大変な世の中になってくると、おそらく一般の大学でも実はそういうニーズは結構あるのではないかなというふうに思うんですが、防衛大学校は文系の教官の方とか理系の教官の方とか、あるいは自衛官の方とか多様なプロフェッショナルが揃っているので、まさにそういった安全保障面での教育をするには他の大学にはない恵まれた特性を持っていますから、そういう特性を十分に生かした教育を今後も工夫していただきたいなというふうに考えます。

(石塚)

次は防衛大学校の教育の中で、国際交流、自衛隊が国際的な場で活躍するとともに、自衛官の人もいろいろ海外に出てきて国際交流したりするようなことも増えてくると思うんですが、これまでも国際士官候補生会議とかですね。それから海外から留学生を受け入れた

り、海外に留学生を出すなどして国際交流を積極的に推進していると思うんですけど、最近はこの動きはどんなふうな感じで進んでいるのでしょうか、

(赤瀬)

現在の久保文明学校長についても非常に力を入れて推進しておりました。自衛隊の国際化が更に進むであろうことに鑑みますと、ある意味当然しかるべきことであるように思います。

海外派遣については、各国士官学校への派遣の他、国際的な戦技競技会、武力紛争法競技会、JICA などの様々な短期的な派遣にもついても増やしており、遠からず、長短合わせて100人を超えるのではないかと聞いております。更には、来年からは、米国土官学校への4年間派遣についても実施する予定です。

海外からの受け入れについても、長期留学生が、現在約130名程度であり、島しょ国などからの受け入れについても検討を行っています。その他、各国からセメスター・短期の受け入れを行っており、これらについても更なる拡大を図っていく予定です。

国際交流事業としては、お話しがあった国際士官候補生会議を毎年実施しており、参加国の拡大を進めているほか、来年については、国際士官候補生ラグビー交流を防衛大学校で実施する予定です。

防衛大学校については、諸外国の士官学校と比べても、かなり国際交流が進んでいるように思いますし、人的ネットワークの構築といった観点から、国際交流の重点な拠点としての役割も果たしているように思います。

これは必ずしも国際交流に限った話ではないのですが、防衛大学校学生については、中で濃密で忙しい生活を送るため、どうしても、他大学の学生に比し、外と触れる機会が少くなる傾向があるように思います。

そのため、国際交流や様々な校外研修などを通じて、多様な価値観に触れ、武者修行し、外から防衛大学校を見るような機会を増やそうとしているところであり、学生の報告会などを見ていると、学生も望んでいるし、良い効果を上げているように思います。

(川崎)

もう当たり前のことですがけれども、ここ数日の報道でもですね。日米韓や日米豪で国際安全保障のいろいろな新しい協力をしていこうじゃないかという話も出ていて、そういう動きの中で、幹部自衛官が実務の中心にいるわけなので、防衛大学校の学生が学生の時から、国際交流に慣れることが、将来大きな力になることは間違いないので、引き続きどんどん力を入れていただきたいな、というふうに思っています。

(石塚)

ひき続きまして、今度はちょっと目先の変わったといいますか。IT とかサイバーの話な

んですけれども、自衛隊ではサイバー対応を強化しようということで、新しく今年になってからのいくつか、サイバーの関係の方針、それから人材の育成、活用といったものとか、あと AI の活用ですね。人工知能の活用といったことも方針を出しています。

もともと防衛大学校っていうのはスタートは理系の大学でスタートしているわけで、やっぱり防衛大学校でもそういう教育の IT 教育のさらなる充実を図っていくべきじゃないかと、それから安保関連三文章なんかに書いてますけど、偽情報対応ですね。SNS なんかを利用した、いろんな形での偽情報への対応といったようなことにも今後防衛大学校学生が直接ですね、そういったものに対応するかどうかは別にして、現実社会の中でそういったものは非常に早く広がってくればいろんな局面で彼らも指揮官なり、そういう立場の幹部としてそういったものに対応する必要がある。

IT とか SNS、こういった最近の新しい技術動向についての教育というのはどんな感じに取り上げているんでしょうか。

(赤瀬)

ご指摘のとおり、幹部自衛官として IT リテラシーを持っていることは当然必須かと思われれます。そのため、リテラシー教育の拡充を行っており、基礎ゼミナールと IT リテラシーを統合した科目として「リテラシー入門」を開講しておりますし、専門家を招き、サイバーリテラシーに関する課外講演を実施したり、IT 機器操作の習熟などについての各種施策を積極的に進めています。

また、SNS に関しては、当然防衛大学校の学生もやっておりますし、その危険性にさらされているところもでもあるわけですので、別途、保全教育についてもしっかりと実施しています。

(石塚)

横須賀エリアのいろんな自衛隊の学校、通信学校とか高等工科大学など含めて、サイバーに力を入れています。

一方で、防衛大学校の学生というのはすぐサイバーの最先端の指揮官になるわけじゃなくて、そういうコースに入ってそういうものをどんどん蓄積して、本格的なサイバーとか IT に対応できる指揮官になっていくという。そういうプロセスもあるので、その基礎のあるものを防衛大学校でしっかり教育してもらえればなという感じはしますけど

(川崎)

今、お話に出てましたけれども、今年度から防衛大学校でサイバー情報工学科を作ったり、今石塚さんおっしゃったように工科大学に、システムサイバー専修コースを作ることにより、自衛隊全体として政府のサイバー対策をサポートするための人材育成を図るという面では相当努力をしているところだろうと思いますし、防衛大学校にもサイバー関係で非常

に優秀な先生がいらっしゃるといふふうに私は理解をしていますし、この分野の発展をま  
さに願っております。

(石塚)

後は、必ずしも防衛大学校の分野じゃないのかもしれないですけど、新たな安全保障に関  
係ある分野として経済安全保障というのを最近いろいろ取り上げられていると思うんです  
けど、防衛大学校はこういった分野にも教育をされていると考えてよろしいでしょうか。

(赤瀬)

経済安全保障といったような最近のトピックについても、防衛学や人文社会学群の教官  
などが触れているのではないかと思います。学生もそのような最近のトピックについても  
かなり強い関心をもっており、卒論などで取り上げたりしているように思います。

(川崎)

防衛大学校の学生、とにかく非常に忙しく、やることが多いのに、新しく勉強したらいい  
なということが次から次で出てくる中で、どこまでそれを教育に取り込むかっては判断が  
難しいことかもしれないと想います。先生方が適切と判断される範囲でぜひ教育に取り込  
んでいただければありがたいな、というふうに考えます。

### 3、予算等

(石塚)

今度は視点を変えて、ちょっと予算とか行政的な側面ですけども昔から言われているこ  
とですけど、防衛大学校は文部省所管でないんで学位を授与できないということで、学位授  
与機構から学士の資格を得てるということなんですけれどもこれについては今でもやっぱり防衛  
大学校でいろいろ議論があるんですか。

(赤瀬)

以前かなり議論されたこともあるように聞きますが、文科省との関係で致し方ないので  
あろうと認識されているためなのかどうか定かではありませんが、ここ数年は、学位授与に  
ついて特に具体的に議論したことはありません。

しかしながら、一般大学と同様、あるいはそれ以上、文科省の基準に従っているとの自負  
があるだけに、もっと防衛大学校にまかせてほしいといったような声は依然としてあるよ  
うには思います。

(石塚)

この問題は防衛大学校だけではなくて、海上保安大学校とか他の大学も同じよう文部省所管の大学じゃないところもあって、難しい問題ですよ。

(赤瀬)

文部省の所管外の大学校というのは、防衛大学校の他にも、海上保安大学校などいろいろあるのだと思いますが、学生数という意味では、防衛大学校が最大なのではないかと思いません。

学校教育法で、学位授与権限を有しているのは、文部省所管の大学と学位授与機構のみと規定されており、その枠組みの変更はなかなか難しいようですが、そうだとすると、もう少し防衛大学校側で実施できる場所があってもおかしくないように思います。

(川崎)

私自身もあまり学位のことで大きな問題があるというような指摘を聞いたことはないのですが、そこについて言えば今のところそういうことを心配しなくてもいいのかな、というふうに考えています。

(石塚)

あと、予算上っていいですか。今の行政組織上、国立大学は今、国立大学法人っていう独立行政法人のような形になっており、予算の執行とか防衛大学校とは違うんですね。

それから、関連して科研費の問題の話もあつたりすると、やっぱりちょっと独特な学校になってるわけですよ。国立大学法人だったら交付金をもらって結構中では裁量が自由にできたり、それから民間の資金の導入も比較的容易にできる一方で、競争が激しくて、お金を集めなきゃいけないという問題もある。

そういう議論も皆さんから聞こえるんですけども、こういった点について、防衛大学校の先生なんかはどんなふうに感じておられるんですか。

(赤瀬)

ご指摘のとおり、他大学の教員が、各省庁の競争的研究資金に自由に申請できるのに防衛大学校の教官はできないとか、他大学に比べて、研究費の使い勝手が悪いといったような声は、私も良く耳にしました。

確かにそのような面があることは事実だと思いますが、防衛大学校の教官が必要な研究費は防衛大学校の予算として確保するべきとか、国の予算を使うのであれば、会計法令に従って適正に使用するべきといったところに起因していると思います。

このあたりは相当ハードルが高い訳ではありますが、これまで様々努力し、科研費の一部は、個人参加と整理して、認められるようになった経緯もあるようです。

いずれにしても、防衛大学校において十分な研究環境を確保することが肝要であり、今後も引き続き、研究予算の拡充等を図ることにより、必要な研究を実施できるようにすることが重要であるかと思えます。

また、研究費の使い勝手についても、適正かつ柔軟な運用を図るため、事務処理の迅速・簡素化、立替払の活用などについて試行を始めたかしているところでもあります。

(川崎)

私は防衛大学校の中にいたことがないので、執行面での問題というのはあまりよくわからないところがありますけれども、逆に本省側から防衛大学校の予算要求を支援するという立場から見ていると、今は非常に防衛全体について理解が得られるような時代になって、防衛費についても幸いいろいろ認めてもらえるような中で、まさにその防衛政策を将来を担う重要な幹部自衛官を育成する防衛大学校の施設整備、教育研究の予算も認めてもらいやすい環境になっているのかな、という気はいたします。でももしかしたら執行面でいろいろ不具合があるのかもしれないけれども、予算をいただくという観点からは私は今の仕組みというのは決して悪くはないのかな、というふうに感じます。

#### 4、自衛隊の幹部養成機関としての位置付け

(石塚)

ちょっと視点の違う問題なんですけども、自衛隊の幹部の養成機関ということで防衛大学校はあるわけなんですけども、例えば統合幕僚長は今、一般大卒でいらっしゃる。

当然、幹部候補生学校に入るときは、ある比率で一般大学と防衛大学校の人が入って、その結果、当然幹部にも一般大学の人もあるわけなんですけども、こういったようなことについて、昔はそんなに一般大学の人的人数も多くなかったし、幹部のポストにつく人も少なかったわけですね。

そういう形で今、防衛大学校以外の方が幹部になっているわけなんですけど、こういうことについて防衛大学校の中で議論があるとか、それから、もしくは防衛大学校の人气に、もしくはさっきのステータスとかいったものに影響するんじゃないかとかそういう議論はあるんですか。

(赤瀬)

確かに、防衛大学校卒の幕僚長が出始めてから、初めての一般大学卒の幕僚長ということではあるかと思いますが、今は A 幹部のおよそ半分は一般大学卒ということですので、何ら不思議なことではないですし、防衛大学校が送り出した幹部自衛官の活躍ぶりによって、防衛大学校の教育機関としての評価は十分に確立されており、防衛大学校のイメージが

損なわれるといったようなことも全くないのではないかと思います。

防衛大学校卒の幕僚長をあまり見かけないような状態にでもなったら、そのような声が出てくるかもしれませんが、そのようなことは考え難いですし、一方で、幕僚長は必ず防衛大学校卒というのも不自然なように思います。一般大学卒の幕僚長が出ることによって、一般大学卒で幹部候補生学校に行こうと思う人が増える可能性もあるかもしれません。

やはり幹部自衛官のソースは1つというよりも2つ以上あって、良い意味で優れた人材を供給することについて競争があった方が良くように思いますし、多様性の観点からも意味があると思います。

(川崎)

全く同感であります。

よく聞く話ですけれども、防衛大学校の中でのクラブ活動も先輩後輩だったので、実際ある程度の年齢になって仕事をしている中で困ったときに話がしやすかったという話を聞くこともありますし、他方で、一般大卒と防衛大学校卒の自衛官の間にも、職場の中でいろいろ一緒に仕事をして出来上がってきた人間関係というのがあるので、それがよく機能して仕事をしているという話も聞きます。

ですからどちらがということではなく、防衛大学校を卒業した経験と、一般大の人が持つバックグラウンドが、今は組織の中ではうまく融合しながら、機能しているというのが実情ではないかなというふうに感じます。

## 5. 結語

防衛大学校は、いわゆる「大学」と「士官学校」の二つの顔を持つと言われるが、その在り方を考えると際にも、この二つの性格を考慮していく必要があるものと思われる。

これまでの議論等を踏まえると、それぞれ以下のような論点が考えられるものかと思う。

「大学」として考えると、防衛大学校学生の募集対象である若年人口の減少が続くことが避けられないことから、これに対してどう対応し、如何に優秀な学生を長期的に安定的に確保し続けるのかという、日本の大学が共通して持つ問題である。

これには、抜本的な解決策はないと思うが、社会の変化や、これに伴い変わっていく幹部自衛官に求められる資質の変化に対応できる学生の募集に適した入試制度を検討し続けることが必要であると思われる。こうした努力の一方、隊舎など学生の生活環境の改善に地道に取り組み、パワーハラスメントなど身近な問題にもしっかりと対応していくことが

必要と思われる。

また、この鼎談が実施された時点において、自衛官の処遇改善に関する関係閣僚会議が進行中であり、精力的な議論が行われている模様である。この会議の結果、今後示されるであろう自衛隊全体の人事教育制度等のあり方を踏まえながら、防衛大学校の学生教育の内容についても、必要に応じ見直しを行っていくとの視点も必要かと思われる。

一方、「士官学校」として考えると、激変する国際情勢や最新の技術を用いた戦い方の変化に対応し、将来の自衛隊幹部の任に耐えうることを念頭に、積極的にこうした動きを学生に教えていくことが必要であると思う。

また、近年発展著しいIT・人工知能などの先端分野では、そのスタートが理科系中心の大学であった強みをいかし教育に力を注ぎ、学生にその基礎を身につけさせるとともに、発展著しい最新の技術動向などについては、外部の力も積極的に使って教育していくことが求められるのではないかと考える。